

2021年4月2日

梅津寿一

## 人新世の資本論

### \* 訂正、19頁 市民議会 気候市民議会

気候市民議会とは（世界2020年6月号による）～

フランスや英国などで開かれている集会などで、気候市民会議と呼ばれている。くじ引きで選ばれた市民が、数週間か数か月かけて気候変動対策を話し合う会議である。

注：斎藤幸平氏は市民議会と訳しているが、「世界」では市民会議としている、以降市民会議とする。

\* フランスは、マクロン大統領が主導して全国から集まった150人による「気候市民会議」が2019年10月に始まった。

\* 英国では、2019年6月の議会による「50年までに温室効果ガス排出0目標」の議決と同時に、目標実現の方策を市民参加で議論する「気候市民会議(Climate Assembly UK)」の実施を決めた。

2020年1月に始まった会議は、3月まで3回にわたって議論を重ねたが、コロナ感染の拡大により、残りの日程はオンラインで進められている。

英国では、各地域の脱炭素化に向けた対策を話し合う自治体レベルの「気候市民会議」が、すでに10以上実施されたり計画されたりしている。

スコットランド政府も独自に「気候市民会議」を準備している。

### 気候市民会議・開催状況（世界、2020年6月号時点）

フランス～2019年10月—2020年夏ごろ

英国・議会下院～2020年1月—5月

ロンドン・カムデン区～2019年7月

オックスフォード市～2019年9月—11月

リーズ市～2019年9月—11月

アイルランド～2017年9月—2018年4月

スコットランド～計画中

スペイン～計画中

**背景**～2018年のグレタ・トゥーンベリに触発された若者たちの行動により、直面する気候危機に対して現状の政策はあまりにも遅すぎるという声が世界中に上がり、イギリスの環境運動「絶滅への反逆」とフランスの「黄色いベスト運動」などに繋がった。フランスの会議は、この「黄色いベスト運動」に対するマクロン大統領の回答だった。

ヨーロッパでは、「2050年までの実質排出量0」という目標で各国の足並みがそろいつつある中で、この目標の前倒しを求める声が上がってきた。脱炭素化という急激な転換をいかに社会的公正な形で進められるかをめぐって、各国・地域で議論が求められる状況になっており、その一つの方法として導入されているのが、「**気候市民会議**」である。

**注：2020年1月、英国における「第1回気候市民会議」報告（バーミンガム開催）**  
（世界2020年6月号、三上直之 “気候変動と民主主義”）参照。

**会議結果の扱われ方**～会議結果は、議会下院の気候市民会議を主催している6つの委員会に提出される。委員会が今後行う調査の中で、その結果を用いられるということであるが、先行きは不透明である（上述の三上氏報告）。

### **民主主義の刷新**

- \* 気候市民会議のように、社会全体の縮図となるように参加者を集めて議論を行い、その結果を政策決定に用いる手法は「ミニ・パブリックス」と総称される。気候市民会議で用いられているのは「**シティズンズ・アセンブリー（市民議会）**」という比較的新しい手法である。既存の代表制民主主義の不調が、このような直接型の議会を求める背景にある（三上氏報告、p180~183）。（了）

参考： 世界、2020年6月号、p174  
三上直之「気候変動と民主主義～欧州で広がる気候市民会議」